

あとがき

今号は、「自殺」課題と向き合うための特集とした。張氏は、精神医学の立場から、ほとんどの自殺者が自殺企図直前までに精神的な変調をきたしていると述べ、また本人が援助を求めることができるような社会づくりが必要であると述べた。川島氏は、子どもたちの「死にたい」は、生きる上での苦痛を表現する言葉が他に見つからないのかも知れず、その言葉の奥に抱えている「生きづらさ」に向き合うことが必要であるという。高橋氏は、2020年の自殺者数は11年ぶりに増加し、特に未成年女性の増加率が著しいことをデータで示したうえで、これはCOVID-19感染拡大の影響も否めないが、感染問題以前から若者の自殺対策ができていなかったことを認めるべきであること、また自殺手段の分析より、3階以上の建物の転落防止管理を徹底するなどの環境整備も重要な対策であることを指摘した。西岡氏は母親が加害者となった「心中」の豊富な事例分析を通じ、家族関係における見捨てられ不安や葛藤、喪失により子どもとの「融合」を強め「心中」にいたる経緯を見事に描き出した。未然防止のためには家族のアセスメントと、母親たちの「話を聞いてほしい」に応えることが重要であると述べた。末木氏は、自殺とメディアの関係として、報道後に自殺の増える「ウェルテル効果」はあっても、報道後に自殺を思い留まる現象「パパゲーノ効果」は実証されていないことを述べながら、メディアを用いた自殺対策の可能性と留意点を紹介した。大塚氏らは自殺未遂者へのケース・マネージメント介入が「救急患者精神科継続支援料」として診療報酬に位置づけられた経緯と、一般市民の精神保健に関する知識と初期対応法の習得を目指したプログラムを紹介した。吉野氏には遺族が周りの人々に望むことについてお尋ねしたところ、普段のままのふるまいで環境調整を心がけ、自死遺族の語れるときが来たら黙って聞くことではないかと教えてくださった。7者7様の素晴らしい論考である。是非、熟読し、家族や職場や地域でのディスカッションにつなげてほしい。

(上別府 圭子)

無断転載禁止